

輸入から貿易収支を考える

田口 さつき

貿易収支は赤字基調へ

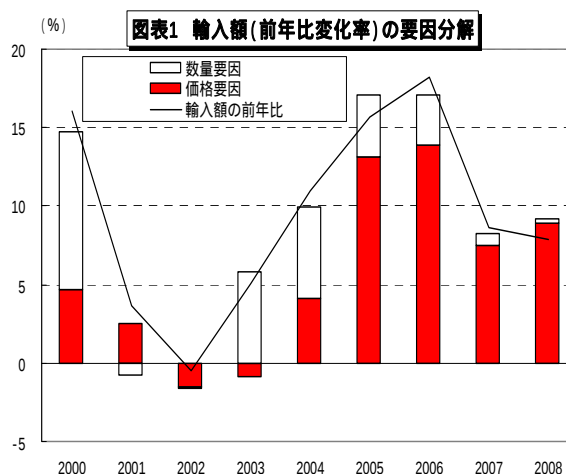
2008 年夏以降、わが国の貿易収支は赤字基調が続いている。これは、原油など国際商品市況が高騰したこともあるが、世界的な景気悪化を受け、輸出数量、輸出価格ともに大きなマイナスとなったことが主因である。

なお、輸入も 08 年 11 月から前年比マイナスで推移しているが、輸出に比べると減少幅は緩やかである。

世界経済の先行き不透明感から、輸出の低迷は続くと思われる。このような状況下、貿易収支の動向を占う上で、輸入の動向が改めて注目される。特にここ数年は、原油や穀物、その他の鉱物資源などの国際商品市況の上昇による輸入額の増加が顕著だったことから、輸入価格の低下が輸入額の減少に結びつくのではという見方が有力である。そこで、本レポートでは、輸入のこれまでの状況を整理した後、当面の動きを考えたい。

原油価格上昇による輸入増が続いた

輸入は、03 年以降 5 年連続で拡大を続けた。この背景を日銀「実質輸入指数」などを用いて、主に「価格要因」「数量要因」に要因分解してみると、価格要因で増加したことがわかる（図表 1）。ここ数年の輸入額の増加を牽引していたのは、鉱物性燃料であった。その鉱物性燃料の中でも約 6 割を占める「原油及び粗油」の輸入量は、2000 年以降ほとんど変わらなかったが、価格は



財務省「貿易統計」、日銀「実質輸入指数」「輸入物価指数」から作成

上昇し続けた。また、ガソリン等の石油製品の輸入量も減少傾向であった。このように、輸入価格、特に原油価格の上昇が輸入額全体に影響していたといえる。

輸入数量の弾性値による分析

しかし、08 年後半の金融危機の勃発以降は、世界的に需要が急激に収縮したこともあり、原油を中心に国際商品市況の下落が続いたのに加え、円高も進んだ。これらは、輸入額の減少に寄与したと考えられる。また、日本経済のマイナス成長が続くのに伴い、輸入数量が減少することも十分予想される。一方で、価格の下落を受け、輸入数量が増える可能性もある。

そこで、輸入数量について、所得弾性値と価格弾性値を試算した。所得は国内総生産、価格は相対価格（輸入物価/国内企業物価）を用いた。

その結果を示したのが、図表 2 である。

図表2 輸入数量の所得・価格弾性値

	所得弾性値	価格弾性値
総合	1.04	-0.25
鉱物性燃料	0.99	-0.14
製品	0.47	-0.56
その他	0.81	-0.43

日銀「実質輸出入指数」、「企業物価指数」、財務省「貿易統計」、内閣府「国民経済計算」より推計

(注1)推計期間は94年 期から08年 期

(注2)「製品」は「化学製品」、「一般機器」、「電気機器」、「輸送用機器」

輸入物価指数は、このところ前年比 ▲20%超で推移している。この状況が続けば、同5～6%ほど数量増に寄与する可能性がある。

その一方、09年度の経済成長率は、前年比 ▲5%程度が見込まれている。この前提に立った場合、所得効果に伴う輸入数量の減少は約 ▲5%となる。そのため、輸入価格低下による数量増分を経済のマイナス成長による数量減分がほぼ相殺し、輸入数量はほぼ横ばいで推移すると見られる。

個別では、08年の輸入増に寄与した「鉱物性燃料」の輸入価格の09年分は前年比で平均4割程度下落が見込まれるが、価格弾性値が低いいため、所得効果分を加えると、輸入数量は微増に留まると考えられる。

「製品」、「その他」は、所得効果に伴う数量減少を価格効果に伴う数量増加が上回る結果、それぞれ前年比+6%、同+2%程度、輸入数量が増加する可能性がある。ただし、輸入数量全体への影響はそれほど大きくない。以上から個別品目の積み上げでも輸入数量の増加は限定的と考えられる。輸入数量がほとんど変化しないとすれば、輸入価格の下落がそのまま輸入額の減少に影響することとなる。

貿易収支の先行き

ここで、輸入額が現状程度の減少率（前

年比 ▲35%）で推移するとし、輸出額との比較から貿易収支の先行きを考えてみたい。なお、輸出価格が前年比 ▲35%程度であれば、前述の推計でも輸入数量は前年比+3%と僅かに増えるに過ぎず、輸入額への影響は軽微である。

輸出は、減少率が縮小するパターンとしてケース1（09年12月に前年比 ▲20%）ケース2（同じく ▲10%）を想定した。図表4より、年後半にかけては貿易黒字が定着することがわかる。以上のように輸入数量の伸びが限定的である中、輸出が改善に向えば、年内の早い段階で貿易黒字化するとみられる。

